

本日の学び:「この慰めによって」 テキスト:第二コリント1章3-11節(参照1:1-2)

【理解の手がかりとして】

■ ニコリントの信徒への手紙概論

第二コリントの手紙は紀元56年にマケドニアから書き送ったもの。「感謝の手紙」と言われる。これはテトス(異邦人キリスト教徒でパウロの身近で働き、コリント教会へパウロの代理者として派遣され、問題の解決にも当たり、献金も募った人)がもたらしたコリント教会の吉報に感謝しながら書いたものであり、主部は1:1-9:15、13:11-13とされる。残りの10:1-13:10は、前後の文脈が中断されており、調子も激情的なので、主部よりも早い時点において書かれた「手厳しい手紙」(涙の手紙)と言われている。

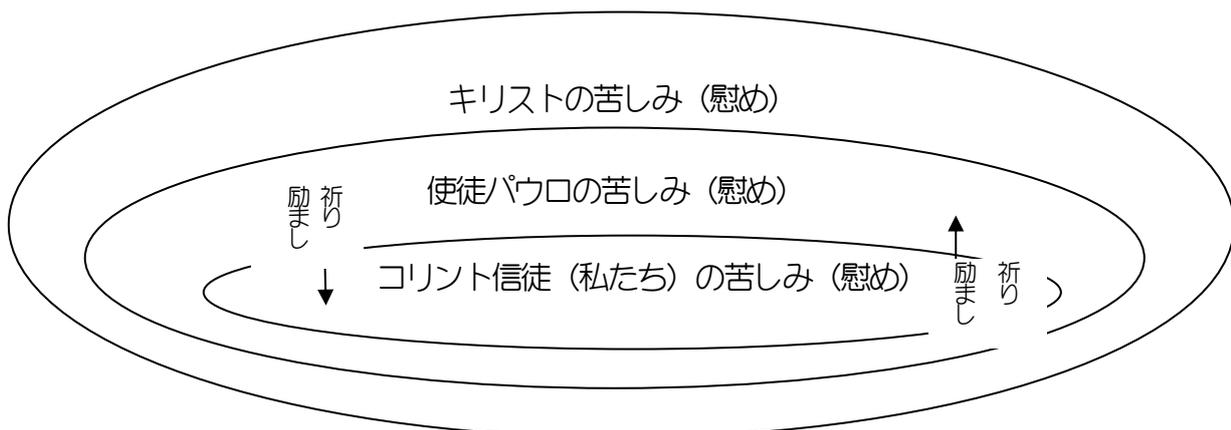
● あいさつと著言(1-1-11)

パウロは冒頭の1-2節で、コリント教会(アカイア州の全地方に住む信者たち)に挨拶を送る。パウロと共に「兄弟テモテ」(1:1)の名が発信人の名として加えられている。テモテは、パウロが始めた宣教を手助けするためにコリントに遣わされた若い弟子(1コリント16:10)。テモテは今コリントから戻り、パウロと一緒にマケドニアに居たのであろう。

3節でパウロは神をほめたたえる。その神への修飾語に注目!「主イエス・キリストの父である神」「慈愛に満ちた父」「慰めを豊かにくださる神」——パウロ(そしてコリントの信徒やこの私たち)が讃える神は「主イエス・キリストの父」であり、「慈愛に満ちた方」であり「慰めを豊かにくださる方」である。

このパウロの時代、キリスト者(教会)への迫害は凄まじかった。それは命をも脅かすものであった。まさに「あらゆる苦難」(1:4)を経験したパウロが言う。「神は、あらゆる苦難に際してわたしたちを慰めてくださる」と。そしてその慰めを経験したパウロは、今度は自らが同じく苦難に会っている人々を慰めることができる、と言う。

その大前提がある。それは「キリストの苦しみ」(1:5)と「キリストによって満ちあふれている」慰め(同)である。この「苦しみ」と「慰め」とは、一見相反するもののように思うが、しかしキリストはその「苦しみ」(十字架の死を含む受難)を潜り「慰め」(復活)を経験された。ゆえに、そのキリストの命にあずかるキリスト者は、その「苦しみ」の中にありながらも「慰め」を享受することができるのである。図式化すると次のようになる。



コリントの人々の苦しみはパウロのそれ以上のものではない。またパウロの苦しみはキリストのそれ以上のものではない。同時に慰めもそうである。このようにキリスト者は、自らの苦しみの経験の中にパウロそしてキリストのそれを重ね合わせることにより、それを乗り越えていくことを得させられる。

8 節で記される「苦難」がどのような経験かは述べられていない。しかし「耐えられないほどひどく圧迫されて、生きる望みさえ失ってしまいました」「死の宣告を受けた思いでした」「死者を復活させてくださる神を頼りにするようになりました」とあるから、それは恐らく拷問や死の恐怖を含むものだったと考えられる。

パウロにとって、キリスト者となって以降、そのような経験は日常であった。「神は、これほどの大きな死の危険からわたしたちを救ってくださった（過去）し、また救ってくださる（未来）ことでしょう。」（1:10）と時制を超えて告白する。パウロは自らの経験から、神の慈愛と慰めに対する揺るぎなき希望（確信）を得ているのである。そしてその確かさに、手紙を受け取るコリントの信徒（私たち）もまた希望（確信）を得るのである。

11 節ではパウロが自分の為の「祈りの援助」を教会に要請している。そう、パウロもまた祈りの援助を必要としていた肉なる存在（人間）である。図のように「祈り・励まし」は決して一方通行ではない。その互いの連帯の中で、信仰者が堅く立っていく有様の中に、多くの人々が感化を受け、神に感謝がさげられ、神の栄光が増すことになるのである。

キリストの苦難と慰め（十字架と復活）、あるいは他のキリスト者の苦難と慰めを思い、自分の苦難を乗り越えた経験はなかつただろうか。またその経験に基づいて、他者の状況に役立った経験はなかつただろうか。そのような経験を分かち合ってみても有意義であろう。

『聖書教育』より

- 「私たちは誰かによって祈られています。…そして、私たちも仲間をおぼえて祈ります。私たちは祈りに関して共なる者とされ、決して一人ぼっちではないのです。…私たちは何よりも互いに先ず神への祈りによる援助を第一としたいと思います。」（聖書の学び～祈りによる援助）